

『太陽コーパス』における従属接続詞の使用実態について

An Investigation of Subordinate Conjunctions in the “Taiyo Corpus”

劉 小妹

LIU, Xiaomei

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第47号 2019年3月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.47 2019

『太陽コーパス』における従属接続詞の使用実態について An Investigation of Subordinate Conjunctions in "Taiyo Corpus"

劉 小妹 (LIU, Xiaomei)

1. はじめに

日本語には、従属節と主節をつなぐ機能をもつ単語が少なからず存在している。例えば、「彼から電話がかかってきたとき、私は本を読んでいた」や「私が本を読んでいる最中に、彼から電話がかかってきた」における「とき」「最中」などである。これらは、形式的には名詞として扱えないこともないが、補助的な単語として独自の意味や機能をもっており、類似する単語も多いことから、一つの品詞グループを構成していると見るべきではないかと思われる。ここでは、従属節と主節をつなぐ機能をもつ単語を、村木 (2012) に従って、「従属接続詞¹」と呼びたいと思う。

同じく補助的な品詞である「後置詞」については、それなりに研究があり、その範囲もほぼ明らかになっている²。しかし、品詞としての従属接続詞については、まだまとまった研究がほとんどない。目立ったものとしては、日本語の品詞体系を再考する中で、名詞から従属接続詞を区別する必要性を説き、いくつかの従属接続詞の事例を取り上げて記述する、村木新次郎氏の研究があるくらいである。

したがって、日本語の従属接続詞の研究は、まず、広範な資料から従属接続詞を網羅的に収集し、その全体像を把握することから始めなければならない。筆者は、特に、近代から現代にかけて、従属接続詞が補助的な品詞としての地位を確立する過程に興味があるので、本稿では、明治・大正期における従属接続詞の使用実態を把握すべく、総合雑誌『太陽』を対象として、語彙・文体・語形に関する調査を行った結果を報告する。調査には、主に『太陽コーパス』を利用した。以下、田中 (2005) の解説を参考にして、雑誌『太陽』ならびに『太陽コーパス』について簡単に紹介しておく。

近代日本語の代表的なコーパスである『太陽コーパス』は、国立国語研究所によって開発され、2005年に公開されている。雑誌『太陽』は、1895年に博文館から創刊された月刊の総合雑誌で、1895 (明治28年) から1928 (昭和3) 年まで刊行されていた。創刊以前に博文館から刊行されていた総合雑誌『日本商業雑誌』『日本農業雑誌』『日本大家論集』『日本之法律』『婦女雑誌』が統合されたため、論説、講演、史伝、地理、小説、政治、法律など、幅広い分野の文章が収められている。現代語確立期の日本語の実態を窺うことのできる貴重な資料である。

『太陽コーパス』には、1895年・1901年・1909年・1917年・1925年の五年分から各年の臨時増刊

¹ 「従属接続詞」にあたるものを、高橋ほか (2005) では「つきそい接続詞」と呼んでいる。

² 鈴木 (1972)、高橋ほか (2005) や村木 (2012) を参照。

号を除いた通常号の全文が収録されている(12冊×5=60冊)。総文字数は約1450万字で、著者数は約1000人である。記事には、「著者・欄名・文体・ジャンル」が、引用には、「種別・話者・文体」が、文字には、「原文・振りがな・踊り字」といった情報が付与されている。その後、2016年に、『太陽コーパス』のデータに形態情報を付与したものが『日本語歴史コーパス』(明治・大正編/雑誌)の一部として公開されている。

『太陽』は、文章のジャンルが幅広く、著者が多数であり、文語体と口語体が共存し、文章量も多いため、これを利用することにより、様々な角度から従属接続詞を収集することができる。

2. 先行研究

2.1 『太陽コーパス』を利用した研究

『太陽コーパス』は、公開以来、近代日本語の研究資料として多くの研究者に活用されている。近代における新漢語の形成、文字・表記、文法表現の変化、文体の推移などのテーマで、多くの研究成果が出されている。ここでは、本稿に関連のあるものとして、馬場(2005)、市村(2015)を見ておく。いずれも特定の品詞類を取り上げ、その使用の状況について計量分析を行ったものである。

まず、馬場(2005)は、『太陽』に多用されている逆接の接続語句の網羅的な一覧表を作成し、これについて、次の三つの観点から分析を行った。

- ・逆接の接続語句の多様性(「青木一覧」³との比較)
- ・逆接の接続語句全体の経年変化
- ・文体からみた高頻度の逆接の接続語句

その結果、以下のようなことを明らかにした。まず、「青木一覧」との比較では、『太陽コーパス』にのみあるものが36語あった。経年変化については、異なり語数には大きな変化は見られないが、延べ語数はやや増加傾向にある。文体については、各語の五年分の総出現頻度が200以上の語を対象に調査したところ、口語的な語(「が、けれども、しかしながら、それでも、だが、でも、ところが」)と文語的な語(「これにはんして、しかるに、しかれども、されど」)に分かれた。さらに、それらの出現頻度の経年変化を分析し、文語的な語の減少と口語的な語の増加の過程を明らかにした。

市村(2015)では、『太陽』と『明六雑誌』のコーパス内に出現する程度副詞を調査し、各語について文語・口語の別による文体的な出現傾向に大きな違いがあることを明らかにし、文末辞だけでなく、程度副詞も文体的な指標になりうるとした。そして、文語から口語への大きな流れのなかで、文語的な語あるいは古くからある副詞が継続して用いられながらも勢いが停滞しつつある一方で、「ひじょうに」や「たいへん」といった口語的で汎用性の高い副詞が拡大しつつあることを確

³ これは、各時代の代表的文献および研究書から「接続詞(的語彙)」を抽出してつくられたものである(青木1973: 210-253)。明治時代のものとしては、「明治初期の新聞の用語」「牡丹灯笼」「福翁自伝」のほか、小説八作品が対象となっている。

認した。

本稿では、これらの先行研究の方法や結論を参考にしつつ、従属接続詞に特有の問題にも着目しながら調査と考察を行う。

2.2 従属接続詞に関する先行研究⁴

従属接続詞という品詞についてのまとまった研究はまだないが、従属接続詞に相当する単語を特殊な語類として一般的な単語から区別しようとする発想は古くからあった。例えば、松下大三郎の「形式名詞（第一種）」、佐久間鼎の「吸着語」、奥津敬一郎の「形式副詞」などである。また、寺村秀夫は、名詞修飾構造の研究において、名詞の接続助詞化という捉え方で従属接続詞に相当する語類にアプローチしている。

一方、日本語の品詞体系の中に品詞としての従属接続詞を認めようとする立場がある。この流れは、鈴木（1972）の「単語的なつながぎ」に始まり、高橋ほか（2005）の「つきそい接続詞」において一つの立場として確立した。高橋ほか（2005）では、つきそい接続詞を「節の述語や句の動詞、形容詞、コピュラとくみあわせて、その節や句の主節に対する関係をあらわす単語」と規定し、日本語の品詞体系の中に明確に位置づけている。ただし、高橋ほか（2005）は、日本語文法の概説書であり、記述は概略的で、そこに挙げられているのは、「つれて」「ともに」「ために」「おもったら」「くせに」「ところで」「ものの」「おもうと」など、少数にとどまる。

鈴木や高橋の品詞についての考え方を受け継ぎ、発展させたのが村木（2012）であり、従属接続詞の記述も一段と詳しくなっている。村木は、統語的な機能を重視する立場から、多機能である「主要な品詞」、単機能で自立できる「周辺の品詞」、単機能で自立できない「補助的な品詞」の三つに品詞を大きく分類する。従属接続詞は、「後置詞」「助動詞」とともに、補助的な品詞の一つである。村木（2012）では、従属接続詞に関する論考が、第3部「従属接続詞をめぐる諸問題」にまとめて収められている。以下、各章の内容を簡単に紹介する。

まず、第1章「日本語の節の種類」では、日本語の従属節の諸タイプを分類したものであり、その中で、連体節を自立的な名詞に接続する真性連体節と非自立的な名詞や名詞離れを起こした単語に接続する擬似連体節に分けている。名詞の性質を喪失するとともに、擬似連体節をうけ、全体で連用節（多くは状況節）として機能するのが従属接続詞である。

第2章「「矢先」と「手前」—「もの・空間」から「つながぎ」へ—」、第3章「擬似連体節をうける—「かたわら」と「一方（で）」の用法を中心に—」、第4章「（とき）をあらわす従属接続詞—「途端（に）」「拍子に」「（やさき（に）」などを例として—」は、従属接続詞に関する各論であり、個々の単語の意味・語形・多品詞性（名詞・後置詞・副詞・従属接続詞・助動詞）、擬似連体節を構成

⁴ 詳しくは、劉（2018）を参照。

する述語部分（動詞述語）の文法的な諸形式や文法的なカテゴリー（ヴォイス・アスペクト・テンス・肯定否定・スタイル）について記述している。村木（2012）がこれらの章で取り上げている従属接続詞をすべて列挙すると、「あいだ、あかつき、あげく、あと、あまり、以上、一方、うえ、おかげ、おり、かたわら、くせ、結果、ころ、際、最中、しりから、すえ、せい、そばから、たび、ため、ついで、手前、とき、ところ、途端、場合、はずみ、拍子、まえ、やさき、ゆえ、わり」の34語である。

本稿は、村木（2012）と同じく、従属接続詞を日本語の一つの品詞と認める立場にたつ。しかし、実際に、どの範囲の単語を従属接続詞と認めるべきかについては、村木の説明ではよく分らない部分もある。「矢先」のように、名詞が元々の語彙的な意味を失い名詞から分かれて従属接続詞化していることがはっきりしているものもあるが、「とき」や「場合」などは、もともと意味が抽象的であり、従属接続詞になったとき、もとの語彙的な意味を失っているとも言えない。名詞の従属接続詞用法とすることも不可能ではないのである。だが、従属接続詞としてしか使われない単語あるいは名詞としても使われるがはっきりと意味の異なる単語のみを従属接続詞とするならば、体系的な欠け記述になる恐れがある。重要なのは、「とき」や「場合」が、主節と従属節を一定の関係でつなぐ働きをする単語として、日本語の複文の構成において重要な働きを担っているという事実である。このような働きをする単語がある時代に存在しているとき、それをその時代の共時態における従属接続詞と認めてよいと考える

3. 調査の方法

3.1 用例の収集

調査の前提として、近代の日本語においてどのような従属接続詞が存在していたかということがあらかじめ分かっているわけではない。むしろそれを明らかにするのが本稿の課題である。そこでまずは、『太陽コーパス』に収録された1895年・1901年・1909年・1917年・1925年の『太陽』のうちの各年の1・2号の全文に目を通しながら、「述語となる単語の連体形⁵を受け、従属節と主節をつなぐ働きをする単語」という基準に照らして、従属接続詞と認められそうな単語の用例を一つ一つ拾う作業を行い、次の62語を収集した。

- ・ 貴郎ね、此處に居る間は・・・(1895年2号)
- ・ 有爲の強國たることを自證したるの暁において・・・(1895年1号)
- ・ 歸つてからは一文にもならない政治運動をやつた擧句に・・・(1901年1号)
- ・ 而も、色々様々に推理したり臆測したりした揚句の果では・・・(1925年2号)
- ・ 二分金が六個張付て隠して有る、私が死んだ後では・・・(1895年1号)

⁵ 連体形に助辞「の」がつく場合もある

- ・要するに日本人にして功名心に驅らるるの餘り・・・(1895年1号)
- ・之をして艦隊操縦の經驗を積ましむる以外に・・・(1917年1号)
- ・時を以て祭掃せしめ以て朕が驚く動を成せし人を念ふの意を昭らかにせよとありし以後・・・(1909年2号)
- ・兵制整ひ堡壘、軍港、兵器、彈藥、糧食等既に備りたる以上は・・・(1895年1号)
- ・明の沈徳符も亦曰へり、元人未だ南宋を滅せざる以前・・・(1895年1号)
- ・漸やく江戸へ着にけり光陰は矢の如し、といふ矢の字と如しの字を云ふ一刹那にも・・・(1895年1号)
- ・諸國の所有する米國有價證券を自國に買戻すを得たる一方に・・・(1917年1号)
- ・抑も弊館が明治二十年六月に創業せし以來・・・(1895年1号)
- ・公權を遞減する謂れなし。是も三章を犯すものなりと論定せられたる上は・・・(1895年1号)
- ・柀に似たる葉の樹を移し栽うるに、年經るうち・・・(1895年1号)
- ・維新の風雲に際會した僥倖兒で、長命したお庇に・・・(1901年1号)
- ・其次元祿十丑年中村座にて五月狂言に「兵根元曾我」といふ名題を以て勤し折は・・・(1895年1号)
- ・引續き露國政府は銀の輸入を防止すべしななどの噂ありたる折柄・・・(1895年1号)
- ・容易に全廢すべからざるが如く、苟も人皆の聖賢ならざる限は・・・(1895年1号)
- ・遠征雜誌を發行しました桑港新報の文學上の記事を擔任し傍ら・・・(1895年2号)
- ・戦争に伴ひ、生産業の減縮したる間において・・・(1917年1号)
- ・全二月と云ふもの、身體はムンヅリとも利かないで寐たきりで・・・(1909年2号)
- ・「はい、もうお蔭様で老夫め助かります。かうして眼も見えせん癖に・・・(1895年1号)
- ・作者及び讀者をして現實に密接せしめ、未來に眼を注がしむるの結果・・・(1895年2号)
- ・日光の隱顯する毎に・・・(1895年1号)
- ・其グレシヤに於きまして哲學者詩人等の夥しく出ました頃は・・・(1895年1号)
- ・英國が往年露國を仇敵として居た際には・・・(1917年2号)
- ・今日は春陽堂から督促に會つて暑い最中に・・・(1917年1号)
- ・日本の國語は國語でありながら、まことに情なき次第にも・・・(1895年1号)
- ・嗚呼長吉は仕合な…親知らずにやつたとて大きくなつた時分・・・(1895年1号)
- ・輪島は讀むだ瞬間に・・・(1917年1号)
- ・談話の面白さ。人接のよさと一々に感服したる末は・・・(1895年2号)
- ・終に裁判の宣告を受くる刹那においては・・・(1909年1号)
- ・病中も醫者から容態を訊かれるたびに・・・(1917年1号)
- ・睡きときに發することもあるべし、その泣く度ごとに・・・(1895年1号)
- ・是等は實に學術に暗きの輩で思想の倒逆して居るが爲に・・・(1895年1号)
- ・十七年西京同志社に入て英學を學ぶ、廿一年宗教革命論を著し次で・・・(1895年1号)
- ・廉は其れを學資にして大學に入る積りで・・・(1917年1号)
- ・されども渠等は未だ風も荒まず、波も暴れざる當坐に・・・(1895年1号)
- ・彼は實に文章の鉅匠たりしに相違なし當時・・・(1895年2号)
- ・何の幸か之に加へん。生等新旭温に照らすの時において・・・(1895年1号)
- ・今の桂内閣——山縣系の内閣ではとても駄目だ。で、文藝院が出來たところで・・・(1909年1号)
- ・一朝氏明法寮の講席に赴かんとするの途次・・・(1895年1号)
- ・偕て船長等はボートに波を切て押出でし途端・・・(1895年2号)
- ・此日の午後尾瀬が原に到るの途中・・・(1895年1号)

- ・此の邊の農家の風俗、鄙びたる中・・・(1895年1号)
- ・渠はソロイス岬を遠がりて幾多の新発見をなしたる後ち・・・(1895年1号)
- ・解釋を容易にする便宜が有る場合には・・・(1895年1号)
- ・又は、寄席藝人が舞臺を歩くやうな腰振で、室中を歩き廻つた果は・・・(1909年1号)
- ・更に、西洋の自我主張の倫理思想が、蟠居してゐる反面には・・・(1925年1号)
- ・唯一呑と屏風倒に頹れむざる凄しさに、剛氣の舟子も啊呀と驚き、腕の力を失ふ隙に・・・(1895年1号)
- ・人、馬を化したるか。 歸途、この馬車に乗りけるが、物に驚きて、狂奔する拍子に・・・(1909年1号)
- ・若し其の眞動機を探らんには、大道の實現を希圖せし外・・・(1895年1号)
- ・一陸は甚だ黒く、沖は眞白に。と見る間に・・・(1895年1号)
- ・凡そ大文學を成ずるの素は、未だ大勝利を博せざるの前に・・・(1895年2号)
- ・露國に公使館を置くことになり、露國駐劄公使として赴任する間に・・・(1925年1号)
- ・蘇秦と張儀とが各其の合縱連衡の説を以て更る更る中原を讎弄するの最中・・・(1895年2号)
- ・泰東の學者として文明の責任を負ふものの・・・(1895年1号)
- ・英國及米國の如き其商業上の競争國が何時にても正金引換に應ずる矢先に・・・(1901年1号)
- ・需要に應じ易きを主として専ら江湖に普及せしめん事を力めたるが故に・・・(1895年1号)
- ・我産米が海外の廉價なる産米と競争して尚ほ歩を譲らざる所以・・・(1901年1号)

これに、上に挙げた、村木 (2012) の34語のうち、この作業では見つからなかった「セイ、ソバカラ、テマエ、ハズミ、ワリ」の5語を加え、以下の67語を得た⁶。

アイダ、アカツキ、アゲク、アゲクノハテ、アト、アマリ、イガイ、イゴ、イジョウ、イゼン、イッセツナ、イッポウ、イライ、ウエ、ウチ、オカゲ、オリ、オリガラ、カギリ、カタワラ、カン、キリ、クセ、ケッカ、ゴト、コロ、サイ、サイチュウ、シダイ、ジブン、シュンカン、スエ、セイ、セツナ、ソバカラ、タビ、タビゴト、タメ、チョクゼン、ツイデ、ツモリ、テマエ、トウザ、トウジ、トキ、トコロ、トジ、トタン、トチュウ、ナカ、ノチ、バアイ、ハズミ、ハテ、ハンメン (反面)、ヒマ、ヒョウシ、ホカ、マ、マエ、マギワ、モナカ、モノノ、ヤサキ、ユエ、ユエン、ワリ

次に、上記の67語のそれぞれについて、改めて、『太陽コーパス』全体に対して「中納言」で検

⁶ これらの語の従属接続詞の用法が『日本国語大辞典 第二版』に記述されているかを確認したところ、67語中20語に記述がないことが確認された。それらは、「アゲクノハテ、イゴ、イッセツナ、イライ、オカゲ、カン、ケッカ、シュンカン、セツナ、チョクゼン、トウザ、トウジ、トジ、トチュウ、ハテ、マ、マエ、マギワ、モナカ、ユエン」である。従属接続詞用法の記述があるものについて、用例の初出を確認したところ、『太陽』の刊行期間以後の例であるものには、「イッポウ」(若き日 [1943])、「テマエ」(私のサハリン [1972])、「ハンメン (反面)」(夜と霧の隅で [1960])、「イガイ」(人間の病気 [1967])があったが、これらの語の従属接続詞用法は『太陽』に確認できた。従属接続詞の初出例が『太陽』の時期と重なる語には、「ソバカラ」(落語・新治療 [1898])、「ワリ」(坑夫 [1908])「アゲク」(置土産 [1900])、「キリ」(化銀杏 [1896])がある。それ以外の従属接続詞用法の初出例は、いずれも1895年(『雑誌』太陽の創刊年)以前のものである。明治以降で1895年までの時期が初出である語には、「アカツキ、アト、イジョウ、カタワラ、サイ、バアイ、ヒマ」がある。「アイダ」(平家物語 [13c前])、「アゲク」(洒落本・船頭部屋 [19C初])の初出例は、明治以前である。ただし、「アイダ」は当時は原因・理由を表していた。

索をかけて用例を収集した。『太陽コーパス』には、形態素解析辞書「近代文語UniDic」に基づいた短単位情報と「語彙素」「語彙素読み」「語形」「語形代表表記」「品詞」「活用例」「活用形」「原文文字列」「振り仮名」などのタグが付与されている。「語彙素」とは単語の様々なバリエーション（語形・活用形・表記形など）を統合した辞書の見出しに相当するものである。「語彙素読み」は、語彙素の読みを片仮名で示したものである。「語形」は、発音や活用形の区別を示したものである。「品詞」は、UniDicの体系に基づいて付与された品詞情報である。「原文文字列」と「振り仮名」は、雑誌『太陽』の原文の表記である。

『太陽』の原文における従属接続詞の表記は、一通りではない。例えば、「オリ」に対する表記には、「折」「おり」「をり」「折り」の四つのパターンがある。原文の表記は予測できないので、「原文文字列」ではなく、「語彙素」および「語彙素読み」を指定して検索することにした。上のリストには「語彙素読み」を示している⁷。

このようにして検索しただけで、従属接続詞の用例が過不足なく収集できるわけではない。例えば、「八ヶ月間」のような例が「カン」の検索結果に含まれてくるのである。『太陽コーパス』におけるこれらの語の品詞情報は基本的に名詞であるため、機械的に従属接続詞を取り出すことができない。検索結果に対して、目視で選別を行わなければならないのである⁸。

3.2 表記の問題

『太陽』の本文においては、仮名遣いや漢字使用が統一されておらず、同じ語に対して複数の表記が併存している。従属接続詞については、少なくとも次の六種類の表記が見られる。

- ①漢字（無ルビ）
- ②漢字（総ルビ）
- ③漢字（バラルビ）
- ④仮名（平仮名・片仮名）
- ⑤漢字（無ルビ）＋送り仮名
- ⑥漢字（ルビ）＋送り仮名

表1は、各語の表記パターンを一覧したものである。各表記の右側に例数を示し、ルビつきものはルビをカッコ内に示してある。

⁷ 語彙素を漢字で表記するのは適切ではないので、本稿では「語彙素読み」を語彙素として扱う。

⁸ 前接語を指定することで、ある程度正確に従属接続詞を抽出できるかもしれないが、筆者は、各単語の従属接続詞以外の用法もいずれ視野に入れたいと考えているので、このような方法をとることにした。

表1 従属接続詞の表記

語彙素(例数)	『太陽』本文の表記
アイダ(217)	あひだ1、間(あいだ)1、間(あひおだ)1、間(あひた)1、間(あひだ)210、間だ3
アカツキ(110)	暁90、暁(あかつき)17、暁き3
アゲク(54)	あげく2、揚句22、揚句(あげく)20、擧句7、擧句(あげく)3
アゲクノハテ(3)	あげくの果1、揚句の果1、揚句の果て1
アト(87)	あと17、後(あと)65、跡3、跡(あと)2
アマリ(45)	あまり7、餘2、餘り31、餘り(あま)5
イガイ(38)	以外34、以外(いぐわい)4
イゴ(11)	以後9、以後(いご)2
イジョウ(850)	以上727、以上(いじやう)119、次上(いじやう)1、已上3
イゼン(100)	以前87、以前(いぜん)13
イッセツナ(7)	一刹那5、一刹那(せつな)2
イッポウ(62)	一方47、一方(ほう)13、一方(ほう)2
イライ(107)	以來103、以來(いらい)3、已來1
ウエ(762)	うへ8、上608、上(うへ)146
ウチ(256)	うち113、間(うち)9、中(うち)82、内28、内(うち)22
オカゲ(19)	おかげ1、お蔭6、お蔭(かげ)4、お庇(かげ)4、御蔭3、御蔭(おかげ)1
オリ(117)	をり11、折52、折(をり)39、折り15
オリカラ(34)	をりから3、折(をり)から3、折から4、折りから1、折柄19、折柄(をりから)4
カギリ(545)	かぎり4、限34、限(かぎり)1、限り428、限り(かぎ)78
カタワラ(41)	かたはら1、傍9、傍はら2、傍ら20、傍ら(かたは)9
カン(1)	間(かん)1
キリ(34)	きり22、ぎり2、限り(き)3、限り(ぎ)2、切(きり)3、切(ぎり)2
クセ(53)	くせ19、癖17、癖(くせ)17
ケッカ(588)	結果521、結果(けつか)1、結果(けつかわ)65、結束1
ゴト(299)	こと4、ごと19、毎232、毎(ごと)44
コロ(508)	ころ18、頃309、頃(ころ)178、頃(コロ)1、比1、比ろ1
サイ(400)	さい1、際345、際(さい)54
サイチュウ(2)	最中(サイチュウ)2
シダイ(53)	次第44、次第(しだい)9
ジブン(141)	時分64、時分(じぶん)77
シユンカン(32)	瞬間15、瞬間(しゅんかん)17
スエ(34)	末16、末(すゑ)18
セイ(1)	せい1
セツナ(16)	刹那4、刹那(せつな)12
ソバ(5)	そば1、傍3、傍(そば)1
タビ(103)	たび27、たんび4、度25、度(たび)40、度び1、毎(たび)5、毎(たんび)1
タビゴト(25)	度毎15、度(たび)毎9、度び毎1
タメ(5139)	ため1081、タメ1、爲1402、爲(ため)203、爲ね2、爲め2171、爲メ4、爲め(た)273、爲め(ため)2
チョクゼン(1)	直前1
ツイデ(73)	ついで8、次いで(つ)2、次で5、次で33、次手1、次手(ついで)1、序4、序(ついで)9、序で4、序で(つ)2、尋で2、尋で2
ツモリ(38)	つもり14、意り(つも)1、故1、心算(つもり)3、積2、積り12、積(つもり)1、積り(つも)4
テマエ(1)	手前1
トウザ(7)	當坐1、當坐(たうざ)1、當座2、當座(たうざ)3
トウジ(121)	當時95、當時(たう)1、當時(たうじ)25
トキ(7428)	とき2388、トキ23、とぎ1、時3508、時(とき)1507
トコロ(1432)	ところ320、所729、所(ところ)79、所ろ6、處218、處(ところ)78、處ろ2
トジ(11)	途次11
トタン(29)	とたん1、トタン2、途端7、途端(とたん)19
トチュウ(58)	途中36、途中(とちう)20、途中(とちゆう)2
ナカ(61)	なか8、中(なか)53
ノチ(286)	のち19、後(のち)219、後ち46、後ち(の)2
バアイ(1239)	場合767、場合(ばあい)1、場合(ばあひ)150、場合311、場合(ばあひ)9
ハズミ(2)	はずみ1、機(はずみ)1

ハテ(11)	果5、果(はて)3、果て2、最終1
ハンメン(反面)(4)	反面3、反面(はんめん)1
ヒマ(12)	ひま7、暇1、暇(ひま)1、隙1、隙(ひま)2
ヒョウシ(15)	機会(へうし)1、拍子6、拍子(ひやうし)7、拍子(へうし)1
ホカ(24)	ほか4、外185、外(ほか)42、他(ほか)8、余5
マ(84)	間(ま)84
マエ(160)	まへ2、前104、前(まへ)54
マギワ(9)	間際5、間際(まぎは)4
モナカ(1)	最中(モナカ)1
モノ(177)	もの175、もん1、物1
ヤサキ(24)	矢さき1、矢先16、矢先(やさき)7
ユエ(3137)	ゆえ3、ゆへ31、ゆゑ183、故2781、故(ゆえ)3、故(ゆへ)3、故(ゆゑ)131、故(ユエ)2
ユエン(52)	所以50、所以(ゆえん)1、所以(ゆゑん)1
ワリ(19)	わり2、割11、割(わり)3、割り2、割り(わ)1

仮名表記であるか、漢字表記でもルビや送り仮名がついていれば、語彙素は問題なく確定できる。⁹ また、ルビや送り仮名のない漢字表記であっても、漢字表記と語彙素が一对一で対応していれば、語彙素の確定には問題は生じない。だが、同じ漢字表記に複数の語彙素が対応する場合には、ルビや送り仮名がなければ、語彙素が確定できないという問題が生じる。これに該当する事例を表2に示す。

表2 複数の語彙素が想定できる漢字表記（ルビ・送り仮名なし）の例

原文文字列	間			後		中		最中	合計
語彙素読み	アイダ	カン	マ	アト	ノチ	ウチ	ナカ	サイチュウ	
例数	423	6	21	2	543	1	281	10	1287

これらについては、どのようにして語彙素読みを確定したかについての基準が明らかでないため、今回の調査対象から外すことにする。したがって、調査の対象となる例数は表1に示したもののから表2の数値を引いたものになる。

4. 調査結果

以上のようにして収集した用例を対象として、次のような調査を行う。まず、筆者が選定した67語の従属接続詞の出現頻度に関する調査を行う。この結果については、4.1で述べる。次に、各語の年次別の出現記事率の調査を行う。この結果については、4.2で述べる。そして、各語の文体別の使用状況を調査する。この結果については、4.3で述べる。最後に、各語がとる格形式の分布を調査する。この結果については、4.4で述べる。

⁹ ただし、ルビがついているにもかかわらず、語彙素読みがルビと異なるケースが27例見られた。これらについてはエラーと見なし、ルビを基準にして語彙素を判断することにした。内訳は、「あひだ／カン」(1例)、「あひだ／マ」(1例)、「うち／ナイ」(17例)、「ご／ノチ」(1例)、「せい／タメ」(1例)、「たび／ゴト」(3例)、「のち／アト」(2例)、「のち／ゴ」(1例)である(「ルビ／語彙素読み」(例数))。なお、例数は注9に説明したエラー修正後の数値である。

4.1 出現頻度

表3は、『太陽コーパス』における従属接続詞の出現頻度を年次別・文体別¹⁰に集計したものである。総出現頻度の高いものから順に並べてある。

表3 年次・文体別の出現頻度

	1895年		1901年		1909年		1917年		1925年		合計
	口語	文語	口語	文語	口語	文語	口語	文語	口語	文語	
トキ	134	1540	419	1377	640	562	1059	153	1492	52	7428
タメ	46	811	219	874	542	400	873	212	1148	14	5139
ユエ	50	787	135	746	216	539	353	157	144	10	3137
トコロ	27	326	65	279	214	110	158	13	225	15	1432
バアイ	12	82	51	175	109	69	254	56	424	7	1239
イジョウ	4	79	30	120	119	62	199	78	156	3	850
ウエ	20	112	47	102	85	62	154	12	166	2	762
ケッカ	1	28	19	111	94	65	105	27	137	1	588
カギリ	2	86	14	99	47	58	105	27	105	2	545
コロ	10	126	28	59	71	19	79	5	108	3	508
サイ	1	55	8	58	29	18	77	18	133	3	400
ゴト	0	81	7	64	26	36	43	8	34	0	299
ノチ	1	45	8	31	21	4	57	20	91	8	286
ウチ	7	19	26	4	40	4	62	0	93	1	256
ホカ	0	21	15	55	35	26	45	7	40	0	244
アイダ	2	3	14	5	19	3	95	14	62	0	217
モノ	5	21	18	7	42	2	32	0	50	0	177
マエ	0	10	3	9	5	4	17	3	109	0	160
ジブン	9	5	22	0	33	1	40	0	31	0	141
トウジ	2	13	1	12	20	6	18	2	47	0	121
オリ	1	47	2	9	8	6	16	2	26	0	117
アカツキ	3	17	5	11	26	8	15	7	18	0	110
イライ	1	37	1	21	12	19	6	5	5	0	107
タビ	2	5	7	2	14	0	33	0	40	0	103
イゼン	0	19	3	22	8	9	14	2	23	0	100
アト	2	6	1	0	18	0	31	0	29	0	87
マ	1	19	7	3	11	3	20	1	18	1	84
ツイデ	1	9	2	5	3	4	13	25	11	0	73
イッポウ	0	2	1	1	2	4	8	28	16	0	62
ナカ	3	17	8	4	5	1	18	0	4	1	61
トチュウ	1	11	3	5	6	2	11	0	18	1	58
アゲク	0	3	3	1	9	1	11	0	26	0	54
クセ	2	1	6	0	8	0	16	1	19	0	53
シダイ	3	11	1	5	5	2	12	1	12	1	53
ユエン	0	12	2	16	2	13	3	1	3	0	52
アマリ	0	13	0	6	4	2	10	2	8	0	45
カタワラ	0	8	1	8	4	4	4	4	8	0	41
イガイ	0	0	0	1	3	3	10	1	20	0	38
ツモリ	3	0	3	1	6	0	13	0	12	0	38
スエ	1	9	4	6	1	1	5	1	6	0	34
オリカラ	0	16	3	6	1	1	2	1	4	0	34

¹⁰ 『太陽コーパス』における口語体と文語体の区別は、文末辞を指標としている。文語の指標としては、「なり、たり、あり、り、つ、ぬ、き、べし」、口語の指標としては、「です、ます、ござる、である、だ、た」が採用されている。

キリ	2	1	5	0	8	0	8	0	10	0	34
シュンカン	0	1	1	2	5	1	8	1	13	0	32
トタン	0	4	7	2	6	0	0	0	10	0	29
タビゴト	0	3	1	2	3	1	5	0	10	0	25
ヤサキ	1	1	2	1	4	1	3	0	11	0	24
ワリ	0	1	0	1	5	0	6	0	6	0	19
オカゲ	0	0	4	0	1	1	5	0	8	0	19
セツナ	0	0	0	2	1	2	6	0	5	0	16
ヒョウシ	0	1	1	1	3	3	4	0	2	0	15
ヒマ	0	6	0	1	0	0	2	0	3	0	12
トジ	0	6	1	1	1	0	0	1	1	0	11
ハテ	0	2	0	1	3	2	2	0	1	0	11
イゴ	0	2	0	0	3	3	2	0	1	0	11
マギワ	0	0	0	0	2	1	2	0	4	0	9
イッセツナ	0	4	0	1	1	0	0	1	0	0	7
トウザ	0	1	0	1	0	0	5	0	0	0	7
ソバ	0	0	0	0	0	0	3	0	2	0	5
ハンメン (反面)	0	0	0	0	0	0	1	0	3	0	4
アゲクノハテ	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	3
サイチュウ	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2
ハズミ	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
カン	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
モナカ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
セイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
チョクゼン	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
テマエ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
総計	360	4545	1234	4336	2609	2148	4163	898	5217	125	25635

表3からわかるように、『太陽』における従属接続詞の出現頻度は語によってかなりばらつきがある。頻度が上位の「トキ、タメ、ユエ」の3語だけで、全体の頻度の約6割を占めている。一方で、「マギワ」以下の13語については、頻度が10にも達していない。

4.2 出現記事率の推移

次に、各語の記事率の推移を見る。記事率とは、総記事数に対する、その語が出現する記事の割合である。調査結果を表4に示す。1925年の記事率の順に並べてある。

表4 年次別の記事率

	1895年	1901年	1909年	1917年	1925年
トキ	64.47%	62.52%	58.74%	55.95%	53.66%
タメ	44.99%	54.80%	58.90%	58.53%	46.68%
バアイ	8.50%	18.11%	17.94%	27.58%	21.93%
トコロ	27.02%	26.46%	28.53%	20.83%	17.44%
ウエ	13.31%	18.11%	17.33%	21.43%	14.17%
イジョウ	8.64%	15.28%	18.10%	28.17%	12.15%
ケツカ	3.29%	14.80%	18.40%	17.66%	11.59%
サイ	6.45%	8.03%	6.44%	13.10%	11.25%
ユエ	43.76%	43.62%	39.72%	30.16%	10.80%
マエ	1.23%	1.73%	1.38%	3.57%	10.24%
コロ	13.99%	9.45%	9.36%	10.91%	10.01%

カギリ	9.60%	13.86%	12.73%	15.87%	9.45%
ノチ	4.66%	2.36%	2.76%	11.51%	8.44%
ウチ	3.16%	3.15%	4.91%	7.34%	7.54%
アイダ	0.69%	2.05%	2.91%	15.67%	5.74%
モノ	2.74%	3.31%	5.37%	4.56%	4.95%
トウジ	2.06%	1.89%	3.68%	3.17%	4.05%
タビ	0.96%	1.42%	1.84%	3.57%	3.71%
ホカ	2.61%	8.50%	7.52%	8.73%	3.60%
ゴト	9.47%	9.45%	7.36%	7.74%	3.49%
ジブン	1.51%	2.36%	4.91%	4.37%	3.26%
アト	0.82%	0.16%	2.15%	4.56%	2.92%
オリ	4.94%	1.57%	1.99%	2.98%	2.70%
アゲク	0.41%	0.63%	1.53%	1.98%	2.59%
イゼン	2.47%	3.46%	2.45%	2.78%	2.47%
クセ	0.41%	0.63%	1.07%	2.98%	2.02%
マ	1.65%	1.42%	1.84%	3.17%	2.02%
イガイ	0.00%	0.16%	0.77%	1.98%	1.91%
トチュウ	1.65%	1.26%	1.23%	1.79%	1.91%
アカツキ	2.61%	2.36%	4.60%	3.57%	1.69%
イッポウ	0.27%	0.31%	0.92%	3.57%	1.69%
シダイ	1.65%	0.79%	1.07%	2.18%	1.46%
シュンカン	0.14%	0.47%	0.92%	1.59%	1.35%
ツモリ	0.27%	0.63%	0.92%	2.18%	1.35%
ヤサキ	0.27%	0.47%	0.77%	0.60%	1.24%
キリ	0.41%	0.63%	1.07%	1.39%	1.12%
ツイデ	1.37%	0.94%	1.07%	4.17%	1.12%
タビゴト	0.41%	0.47%	0.61%	0.99%	1.01%
アマリ	1.78%	0.94%	0.92%	2.18%	0.90%
オカゲ	0.00%	0.47%	0.31%	0.99%	0.90%
カタワラ	0.96%	1.42%	1.07%	1.59%	0.90%
トタン	0.55%	1.10%	0.61%	0.00%	0.90%
スエ	1.23%	1.57%	0.31%	1.19%	0.67%
ワリ	0.14%	0.16%	0.77%	0.99%	0.67%
セツナ	0.00%	0.31%	0.46%	0.60%	0.56%
ナカ	2.19%	1.42%	0.77%	2.38%	0.56%
イライ	4.12%	3.46%	3.83%	2.18%	0.45%
オリカラ	2.19%	1.26%	0.31%	0.60%	0.45%
マギワ	0.00%	0.00%	0.46%	0.40%	0.45%
ハンメン (反面)	0.00%	0.00%	0.00%	0.20%	0.34%
ヒマ	0.82%	0.16%	0.00%	0.40%	0.34%
ユエン	1.51%	2.52%	1.84%	0.60%	0.34%
アゲクノハテ	0.00%	0.00%	0.00%	0.20%	0.22%
ソバ	0.00%	0.00%	0.00%	0.60%	0.22%
ヒョウシ	0.14%	0.31%	0.92%	0.60%	0.22%
イゴ	0.27%	0.00%	0.92%	0.40%	0.11%
サイチュウ	0.00%	0.00%	0.00%	0.20%	0.11%
セイ	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.11%
チョクゼン	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.11%
テマエ	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.11%
トジ	0.82%	0.31%	0.15%	0.20%	0.11%
ハテ	0.27%	0.16%	0.77%	0.40%	0.11%
イッセツナ	0.55%	0.16%	0.15%	0.20%	0.00%
カン	0.00%	0.00%	0.00%	0.20%	0.00%
トウザ	0.14%	0.16%	0.00%	0.79%	0.00%
ハズミ	0.00%	0.00%	0.00%	0.40%	0.00%
モナカ	0.00%	0.00%	0.00%	0.20%	0.00%

1895年と1901年の記事率の平均値と1917年と1925年の記事率の平均値を対比すると、後者を前者で割った数値が2.0以上であるものは、「アイダ、アゲク、アト、イガイ、イッポウ、ウチ、オカゲ、キリ、クセ、シュンカン、セツナ、タビ、タビゴト、ツイデ、ツモリ、トウザ、ノチ、マエ、ヤサキ、ワリ」の20語に及ぶ。これらは、この間に出現記事率が大幅に増加した語である。一方、この値が0.5であるものは、「ユエ、ユエン、イライ、オリカラ、トジ、イッセツナ」の6語である。これらは、この間に出現記事率が大幅に減少した語である。多くの語で出現記事率の大幅な増加が見られ、従属接続詞としての働きが活性化していることが窺える。出現記事率が大幅に減少している語は、文語体の使用が偏るために（後述）、出現記事率を減らすことになったと考えられる。

4.3 文体別の使用状況

表5は、各語の文体別の出現頻度および文体別の出現記事数、各文体のすべての記事に対する出現記事の比率を集計したものである。口語記事率の高いものから順に並べてある。

表5 文体別の出現頻度・出現記事数・出現記事率

	口語 (頻度)	文語 (頻度)	口語記事数	文語記事数	口語記事率	文語記事率
トキ	3744	3684	1075	934	60.63%	58.23%
タメ	2828	2311	982	788	55.39%	49.13%
トコロ	689	743	426	385	24.03%	24.00%
バアイ	850	389	413	215	23.29%	13.40%
ユエ	898	2239	379	724	21.38%	45.14%
ウエ	472	290	336	223	18.95%	13.90%
イジョウ	508	342	322	206	18.16%	12.84%
ケッカ	356	232	261	169	14.72%	10.54%
コロ	296	212	206	161	11.62%	10.04%
カギリ	273	272	205	200	11.56%	12.47%
サイ	248	152	182	124	10.27%	7.73%
ウチ	228	28	154	25	8.69%	1.56%
アイダ	192	25	145	22	8.18%	1.37%
ノチ	178	108	133	67	7.50%	4.18%
モノ	147	30	117	26	6.60%	1.62%
マエ	134	26	113	25	6.37%	1.56%
ホカ	135	109	113	85	6.37%	5.30%
ジブン	135	6	103	6	5.81%	0.37%
ゴト	110	189	94	153	5.30%	9.54%
トウジ	88	33	73	30	4.12%	1.87%
タビ	96	7	72	7	4.06%	0.44%
アト	81	6	66	4	3.72%	0.25%
アカツキ	67	43	56	41	3.16%	2.56%
マ	57	27	49	18	2.76%	1.12%
オリ	53	64	48	50	2.71%	3.12%
クセ	51	2	45	2	2.54%	0.12%
アゲク	49	5	45	5	2.54%	0.31%
イゼン	48	52	45	47	2.54%	2.93%
トチュウ	39	19	35	19	1.97%	1.18%
ツモリ	37	1	34	1	1.92%	0.06%
シダイ	33	20	31	17	1.75%	1.06%

キリ	33	1	30	1	1.69%	0.06%
イガイ	33	5	29	4	1.64%	0.25%
ナカ	38	23	29	18	1.64%	1.12%
ツイデ	30	43	27	27	1.52%	1.68%
イッポウ	27	35	26	17	1.47%	1.06%
シュンカン	27	5	25	5	1.41%	0.31%
イライ	25	82	21	71	1.18%	4.43%
ヤサキ	21	3	21	3	1.18%	0.19%
アマリ	22	23	21	23	1.18%	1.43%
タビゴト	19	6	18	6	1.02%	0.37%
オカゲ	18	1	17	1	0.96%	0.06%
トタン	23	6	17	6	0.96%	0.37%
スエ	17	17	17	16	0.96%	1.00%
ワリ	17	2	16	2	0.90%	0.12%
カタワラ	17	24	16	23	0.90%	1.43%
オリカラ	10	24	10	23	0.56%	1.43%
ユエン	10	42	9	36	0.51%	2.24%
セツナ	12	4	9	4	0.51%	0.25%
ヒョウシ	10	5	9	5	0.51%	0.31%
マギワ	8	1	8	1	0.45%	0.06%
イゴ	6	5	6	5	0.34%	0.31%
ハテ	6	5	6	5	0.34%	0.31%
ソバ	5	0	5	0	0.28%	0.00%
ヒマ	5	7	5	7	0.28%	0.44%
ハンメン (反面)	4	0	4	0	0.23%	0.00%
トウザ	5	2	4	2	0.23%	0.12%
アゲクノハテ	3	0	3	0	0.17%	0.00%
トジ	3	8	3	8	0.17%	0.50%
サイチュウ	2	0	2	0	0.11%	0.00%
ハズミ	2	0	2	0	0.11%	0.00%
セイ	1	0	1	0	0.06%	0.00%
チョクゼン	1	0	1	0	0.06%	0.00%
イッセツナ	1	6	1	6	0.06%	0.37%
テマエ	1	0	1	0	0.06%	0.00%
モナカ	1	0	1	0	0.06%	0.00%
カン	0	1	0	1	0.00%	0.06%

以下、総出現頻度が10未満である「マギワ、ソバ、ハンメン (反面)、トウザ、アゲクノハテ、サイチュウ、ハズミ、セイ、チョクゼン、イッセツナ、テマエ、モナカ、カン」を除いて、各語の文体的な使用傾向を口語記事率と文語記事率の対比によって分析する¹¹。

まず、口語記事率と文語記事率の高い方を低い方で割った数値が1.2未満であるものは、「トキ、タメ、トコロ、カギリ、オリ、イゼン、ツイデ、スエ、イゴ、ハテ」の11語である。これらは、明確な文体的な傾向のない従属接続詞であると言えよう。次に、口語記事率を文語記事率で割った数値が2.0以上であるものは、「ウチ、アイダ、モノ、マエ、ジブン、トウジ、タビ、アト、マ、クセ、アゲク、ツモリ、キリ、イガイ、シュンカン、ヤサキ、タビゴト、オカゲ、トタン、ワリ、セツナ」の21語である。これらは、口語体で使用される傾向のある従属接続詞である。逆に、文語記事率を

¹¹ 『太陽コーパス』に収録された口語記事の総数は1773で、文語記事の総数は1604である。

口語記事率で割った数値が2.0以上であるものは、「ユエ、ユエン、イライ、オリカラ、トジ」の5語である。これらは、文語体で使用される傾向のある従属接続詞である。残る17語の「バアイ、イジョウ、ウエ、ケッカ、サイ、ゴト、ノチ、オリ、アカツキ、イッポウ、ナカ、トチュウ、シダイ、カタワラ、ヒョウシ、ヒマ、ホカ」は、文体的な傾向の有無についてはっきりしたことが言えない語である。

各語の文体的な特徴の年次推移についても見ておきたい。表6は、年次別・文体別の出現記事率の調査結果である。

表6 年次別・文体別の出現記事率

	1895年		1901年		1909年		1917年		1925年	
	口語	文語	口語	文語	口語	文語	口語	文語	口語	文語
トキ	100.00%	61.83%	61.90%	62.74%	64.89%	52.06%	65.92%	37.21%	53.77%	53.85%
タメ	64.10%	43.98%	47.62%	57.39%	60.64%	58.43%	68.45%	40.31%	48.62%	17.31%
ユエ	69.23%	42.38%	29.76%	48.61%	27.39%	58.43%	30.99%	32.56%	10.66%	13.46%
トコロ	46.15%	25.98%	24.40%	27.19%	33.78%	22.10%	27.04%	6.98%	17.25%	21.15%
バアイ	23.08%	7.69%	16.07%	18.84%	20.21%	15.36%	31.83%	20.16%	22.51%	13.46%
ウエ	25.64%	12.63%	21.43%	16.92%	17.82%	17.23%	27.89%	6.98%	14.85%	3.85%
イジョウ	10.26%	8.56%	11.90%	16.49%	20.48%	15.36%	32.68%	20.16%	12.57%	5.77%
ケッカ	2.56%	3.34%	8.93%	16.92%	19.15%	17.98%	20.00%	13.95%	12.22%	1.92%
カギリ	5.13%	9.87%	7.14%	16.27%	11.44%	14.98%	18.59%	10.85%	9.82%	3.85%
コロ	20.51%	13.64%	11.31%	8.78%	11.44%	6.74%	14.08%	3.88%	10.30%	5.77%
サイ	2.56%	6.68%	2.38%	10.06%	6.91%	5.99%	14.93%	10.08%	11.74%	3.85%
ゴト	0.00%	10.01%	3.57%	11.56%	6.12%	9.36%	9.58%	3.88%	3.71%	0.00%
ノチ	2.56%	4.79%	2.38%	2.36%	3.99%	1.12%	12.96%	9.30%	8.02%	15.38%
ホカ	0.00%	2.76%	7.14%	8.99%	7.98%	7.12%	10.99%	3.88%	3.83%	0.00%
ウチ	17.95%	2.32%	9.52%	0.86%	7.45%	1.50%	10.42%	0.00%	7.90%	1.92%
アイダ	5.13%	0.44%	4.76%	1.07%	4.26%	1.12%	19.15%	8.53%	6.11%	0.00%
モノ	7.69%	2.47%	8.33%	1.50%	8.78%	0.75%	6.48%	0.00%	5.27%	0.00%
マエ	0.00%	1.31%	1.19%	1.93%	1.33%	1.50%	4.23%	2.33%	10.90%	0.00%
ジブン	15.38%	0.73%	8.93%	0.00%	8.24%	0.37%	6.20%	0.00%	3.47%	0.00%
トウジ	5.13%	1.89%	0.60%	2.36%	5.05%	1.87%	4.23%	0.78%	4.31%	0.00%
オリ	2.56%	5.08%	1.19%	1.71%	2.13%	1.87%	3.66%	1.55%	2.87%	0.00%
アカツキ	7.69%	2.32%	2.38%	2.36%	5.85%	3.00%	3.38%	4.65%	1.80%	0.00%
イゼン	0.00%	2.61%	1.79%	4.07%	2.13%	3.00%	3.38%	1.55%	2.63%	0.00%
イライ	2.56%	4.21%	0.60%	4.50%	2.39%	5.99%	1.69%	3.88%	0.48%	0.00%
タビ	5.13%	0.73%	4.17%	0.43%	3.19%	0.00%	5.07%	0.00%	3.95%	0.00%
アト	5.13%	0.58%	0.60%	0.00%	3.72%	0.00%	6.48%	0.00%	3.11%	0.00%
マ	2.56%	1.60%	4.17%	0.43%	2.39%	1.12%	4.23%	0.78%	2.04%	1.92%
ツイデ	2.56%	1.31%	1.19%	0.86%	0.80%	1.50%	3.10%	7.75%	1.20%	0.00%
トチュウ	2.56%	1.60%	1.79%	1.07%	1.60%	0.75%	2.54%	0.00%	1.92%	1.92%
アゲク	0.00%	0.44%	1.79%	0.21%	2.39%	0.37%	2.82%	0.00%	2.75%	0.00%
シダイ	7.69%	1.31%	0.60%	0.86%	1.33%	0.75%	2.82%	0.78%	1.44%	1.92%
クセ	5.13%	0.15%	2.38%	0.00%	1.86%	0.00%	3.94%	0.78%	2.16%	0.00%
ナカ	7.69%	1.89%	3.57%	0.64%	1.06%	0.37%	3.38%	0.00%	0.48%	1.92%
ユエン	0.00%	1.60%	1.19%	3.00%	0.53%	3.75%	0.56%	0.78%	0.36%	0.00%
アマリ	0.00%	1.89%	0.00%	1.28%	1.06%	0.75%	2.54%	1.55%	0.96%	0.00%
イッポウ	0.00%	0.29%	0.60%	0.21%	0.53%	1.50%	2.25%	7.75%	1.80%	0.00%
カタワラ	0.00%	1.02%	0.60%	1.71%	0.80%	1.50%	1.13%	3.10%	0.96%	0.00%
ツモリ	5.13%	0.00%	1.79%	0.21%	1.60%	0.00%	3.10%	0.00%	1.44%	0.00%
イガイ	0.00%	0.00%	0.00%	0.21%	0.80%	0.75%	2.54%	0.78%	2.04%	0.00%

オリカラ	0.00%	2.32%	1.79%	1.07%	0.27%	0.37%	0.56%	0.78%	0.48%	0.00%
スエ	2.56%	1.16%	2.38%	1.28%	0.27%	0.37%	1.41%	0.78%	0.72%	0.00%
キリ	5.13%	0.15%	2.38%	0.00%	1.86%	0.00%	1.97%	0.00%	1.20%	0.00%
シュンカン	0.00%	0.15%	0.60%	0.43%	1.33%	0.37%	1.97%	0.78%	1.44%	0.00%
タビゴト	0.00%	0.44%	0.60%	0.43%	0.80%	0.37%	1.41%	0.00%	1.08%	0.00%
ヤサキ	2.56%	0.15%	1.19%	0.21%	1.06%	0.37%	0.85%	0.00%	1.32%	0.00%
トタン	0.00%	0.58%	2.98%	0.43%	1.06%	0.00%	0.00%	0.00%	0.96%	0.00%
オカゲ	0.00%	0.00%	1.79%	0.00%	0.27%	0.37%	1.41%	0.00%	0.96%	0.00%
ワリ	0.00%	0.15%	0.00%	0.21%	1.33%	0.00%	1.41%	0.00%	0.72%	0.00%
ヒョウシ	0.00%	0.15%	0.60%	0.21%	0.80%	1.12%	0.85%	0.00%	0.24%	0.00%
セツナ	0.00%	0.00%	0.00%	0.43%	0.27%	0.75%	0.85%	0.00%	0.60%	0.00%
ヒマ	0.00%	0.87%	0.00%	0.21%	0.00%	0.00%	0.56%	0.00%	0.36%	0.00%
イゴ	0.00%	0.29%	0.00%	0.00%	0.80%	1.12%	0.56%	0.00%	0.12%	0.00%
トジ	0.00%	0.87%	0.60%	0.21%	0.27%	0.00%	0.00%	0.78%	0.12%	0.00%
ハテ	0.00%	0.29%	0.00%	0.21%	0.80%	0.75%	0.56%	0.00%	0.12%	0.00%
マギワ	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.53%	0.37%	0.56%	0.00%	0.48%	0.00%
イッセツナ	0.00%	0.58%	0.00%	0.21%	0.27%	0.00%	0.00%	0.78%	0.00%	0.00%
トウザ	0.00%	0.15%	0.00%	0.21%	0.00%	0.00%	1.13%	0.00%	0.00%	0.00%
ソバ	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.85%	0.00%	0.24%	0.00%
ハンメン (反面)	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.28%	0.00%	0.36%	0.00%
アゲクノハテ	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.28%	0.00%	0.24%	0.00%
サイチュウ	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.28%	0.00%	0.12%	0.00%
ハズミ	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.56%	0.00%	0.00%	0.00%
カン	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.78%	0.00%	0.00%
セイ	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.12%	0.00%
チョクゼン	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.12%	0.00%
テマエ	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.12%	0.00%
モナカ	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.28%	0.00%	0.00%	0.00%

以下、1895年と1901年の文体別の記事率の平均値と1917年と1925年の文体別の記事率の平均値を対比する。

まず、口語体については、後者をが前者で割った数値が2.0以上であるものは、口語体の「タビゴト、アゲク、ゴト、イゼン、ホカ、カギリ、マエ、ケツカ、サイ、イジョウ、カタワラ、シュンカン、ノチ、アイダ、イッポウ」の15語であり、これらは口語体での使用の増加が著しい語である。逆に、後者を前者で割った数値が0.5以下であるものは、「キリ、ジブン、スエ、トジ、トタン、ナカ、ユエ」の7語であり、これらは口語体での使用が大幅に減少した語である。

次に、文語体については、後者を前者で割った数値が2.0以上であるものは、「アイダ、イガイ、イッポウ、クセ、ツイデ、ノチ」の6語である。これらは、この文体に出現記事率が大幅に増加したの文語体での使用の増加が著しい語である。逆に一方、後者をが前者で割った数値が0.5以下であるものは、文語体の「ゴト、イゼン、ホカ、スエ、ユエン、トウジ、オリ、オリカラ、ウエ、コロ、イライ、アマリ」の12語であり、これらは文語体での使用が大幅に減少した語である。

いずれの文体でも大幅に増加しているのは、「アイダ、イッポウ、ノチ」であり、いずれの文体でも大幅に減少しているのは、「スエ」である。そして、文体別の記事率が年次的大幅に増加しあるいは減少するものを以下のように整理した。このように、文語的な語は口語記事率が減少して

いるが、多くの語で口語記事率の大幅な増加が見られる。口語体の普及に伴い、従属接続詞の使用が増加していることが窺える。

4.4 格形式

従属接続詞には名詞的な性質もあり、固定的ではあるが、格形式をとる。ここで言う格形式には、格助辞のついた有標形式だけでなく、格助辞のつかない、いわゆる「はだか格」も含まれる¹²。各語の格形式の分布を表7に示す¹³。

表7 格形式の頻度の分布

	はだか格	に格	で格	より・ から格	まで格	へ格	その他
アイダ	123	88	0	0	0	0	6
アカツキ	17	71	0	0	1	0	21
アゲク	39	11	0	0	0	0	4
アゲクノハテ	1	2	0	0	0	0	0
アト	17	13	53	3	0	0	1
アマリ	42	3	0	0	0	0	0
イガイ	13	22	0	0	0	0	3
イゴ	8	0	0	0	0	0	3
イジョウ	839	11	0	0	0	0	0
イゼン	22	25	0	33	0	0	20
イッセツナ	6	1	0	0	0	0	0
イッポウ	13	38	4	1	0	0	6
イライ	107	0	0	0	0	0	0
ウエ	237	330	55	4	0	3	133
ウチ	96	130	14	16	0	0	0
オカゲ	0	4	14	0	0	0	1
オリ	83	32	0	0	0	0	2
オリカラ	33	0	0	0	0	0	1
カギリ	515	3	0	0	0	0	27
カタワラ	40	1	0	0	0	0	0
カン	0	0	0	0	0	0	1
キリ	20	1	13	0	0	0	0
クセ	0	53	0	0	0	0	0
ケッカ	578	0	0	2	0	0	8
ゴト	3	296	0	0	0	0	0
コロ	321	109	0	62	12	0	4
サイ	214	163	1	2	0	0	20
サイチュウ	0	2	0	0	0	0	0
シダイ	15	6	20	0	0	0	12
ジブン	35	94	0	10	1	0	1
シュンカン	14	13	0	0	0	0	5
スエ	30	4	0	0	0	0	0
セイ	0	0	1	0	0	0	0

¹² ここでは、格形式のみに注目し、とりたて形式は無視する。すなわち、「ときに」「ときには」「ときにも」などはすべてに格として扱い、「とき」「ときは」「ときも」などはすべてはだか格として扱う。

¹³ 「その他」には、「ときにあたって」のような格形式に後置詞がついたものや、「矢先故」のような複合した例を入れてある。

セツナ	7	5	0	0	0	0	4
ソバ	0	0	0	5	0	0	0
タビ	7	94	0	0	0	0	2
タビゴト	1	24	0	0	0	0	0
タメ	1653	3486	0	0	0	0	0
チョクゼン	0	0	0	0	1	0	0
ツイデ	48	25	0	0	0	0	0
ツモリ	1	0	37	0	0	0	0
テマエ	1	0	0	0	0	0	0
トウザ	6	1	0	0	0	0	0
トウジ	81	15	0	7	0	0	18
トキ	5554	1489	40	106	7	0	232
トコロ	1021	0	293	0	0	118	0
トジ	9	2	0	0	0	0	0
トタン	9	19	0	0	0	0	1
トチュウ	38	10	8	0	0	0	2
ナカ	3	53	4	0	0	0	1
ノチ	215	59	5	0	0	0	7
バアイ	241	761	12	1	0	0	224
ハズミ	0	2	0	0	0	0	0
ハテ	7	3	0	0	0	0	1
ハンメン (反面)	1	3	0	0	0	0	0
ヒマ	1	11	0	0	0	0	0
ヒョウシ	0	14	1	0	0	0	0
ホカ	136	107	0	0	0	0	1
マ	6	75	0	0	0	2	1
マエ	36	108	0	11	1	1	3
マギワ	1	6	0	0	2	0	0
モナカ	0	1	0	0	0	0	0
モノ	177	0	0	0	0	0	0
ヤサキ	16	5	0	0	0	3	0
ユエ	814	2323	0	0	0	0	0
ユエン	45	4	0	0	0	0	3
ワリ	0	19	0	0	0	0	0

総出現頻度が10未満の「マギワ、イッセツナ、トウザ、ソバ、ハンメン (反面)、アゲクノハテ、サイチュウ、ハズミ、カン、セイ、チョクゼン、テマエ、モナカ」を除くと、以下のようなことが言える。

まず、ほとんどの語がはだか格またはに格をとる。はだか格しかとらないのは、「イライ、モノ」の2語、に格しかとらないのは、「クセ、ワリ」の2語である。はだか格にもに格もとるのは、「トキ、タメ、ユエ、バアイ、イジョウ、ウエ、カギリ、コロ、サイ、ゴト、ノチ、ウチ、ホカ、アイダ、マエ、ジブン、オリ、トウジ、アカツキ、タビ、イゼン、アト、マ、ツイデ、イッポウ、ナカ、トチュウ、シダイ、ユエン、アゲク、アマリ、カタワラ、イガイ、キリ、スエ、シュンカン、トタン、タビゴト、ヤサキ、セツナ、ハテ、ヒマ、トジ」の43語である。

また、現代語との違いとしては、「オカゲニ」「ヒョウシデ」「ウエニテ」のような格形式をとる例がいくつか見られること、「トキニアツタッテ」「バアイニオイテ」のように、格形式がさらに後置詞の「オイテ」「アツタッテ」などを伴った例が目につくことが指摘できる。

はだか格にもに格もとるもの（総出現頻度が10以上）について、口語と文語で両者の分布に違いな

いかを調査した結果を示したのが表8である。

表8 口語体と文語体におけるに格・はだか格の分布

	口語		文語			口語		文語	
	に格	はだか格	に格	はだか格		に格	はだか格	に格	はだか格
トキ	1194	2379	295	3175	マ	52	3	23	3
タメ	2155	673	1331	980	ツイデ	24	6	1	42
ユエ	462	436	1861	378	イッポウ	7	11	31	2
トコロ	0	314	0	707	ナカ	31	2	22	1
バアイ	556	185	205	56	トチュウ	7	24	3	14
イジョウ	11	497	0	342	アゲク	11	35	0	4
ウエ	217	115	113	122	クセ	51	0	2	0
ケッカ	0	350	0	228	シダイ	2	8	4	7
カギリ	0	264	3	251	ユエン	2	7	2	38
コロ	75	181	34	140	アマリ	0	22	3	20
サイ	117	120	46	94	カタワラ	1	16	0	24
ゴト	109	1	187	2	イガイ	21	11	1	2
ノチ	53	117	6	98	オリカラ	0	10	0	23
ウチ	124	76	6	20	キリ	1	19	0	1
ホカ	78	56	29	80	スエ	3	14	1	16
アイダ	83	105	5	18	シュンカン	12	12	1	2
モノ	0	147	0	30	トタン	18	5	1	4
マエ	100	24	8	12	タビゴト	19	0	5	1
ジブン	92	32	2	3	ヤサキ	4	15	1	1
トウジ	12	57	3	24	ワリ	17	0	2	0
オリ	20	32	12	51	セツナ	5	6	0	1
アカツキ	42	12	29	5	ヒョウシ	9	0	5	0
イライ	0	25	0	82	ヒマ	5	0	6	1
タビ	89	5	5	2	トジ	1	2	1	7
イゼン	13	14	12	8	ハテ	3	3	0	4
アト	11	15	2	2					

はだか格とに格の合計に対するはだか格の割合を全体で見ると、口語体が52.2%であるのに対し、文語体は62.3%であり、文語体の方がはだか格が現れやすいと言える。

また、はだか格とに格の合計に対するはだか格の割合を個々の語について見ると（口語体または文語体の用例数が10例未満のものは除く）、文語体と口語体の間に20%以上の差があるものは以下の9語である。まず、口語体の方が文語体よりもはだか格の割合が20%以上高いものは、「ユエ（48.6%：16.9%）、イッポウ（61.1%：6.1%）の2語である（口語体：文語体）。逆に、文語体の方が口語体よりもはだか格の割合が20%以上高いものは、「トキ（66.6%：91.5%）、ノチ（68.8%：94.2%）、ホカ（41.8%：73.39%）、ウチ（38.0%：76.92%）、アイダ（19.35%：60.0%）、マエ（19.35%：60.0%）、ツイデ（20.0%：97.7%）」の7語である。

5. おわりに

以上、本稿では、『太陽コーパス』から収集した従属接続詞の用例について行った調査の結果を報告した。この調査によって、次のような実態が明らかになった。

まず、個々の従属接続詞の出現頻度については、従属接続詞の各語に使用頻度のばらつきがあるが、「トキ、タメ、ユエ」が頻用される従属接続詞であることが分かった。

次に、出現記事率の推移については、多くの語で出現記事率の大幅な増加が見られ、明治期から大正期にかけて、従属接続詞の使用が活性化していることが分かった。

そして、文体別の使用状況については、明確な文体的な傾向が見られない「トキ、タメ、トコロ、カギリ、コロ、ホカ、イゼン、ツイデ、アマリ、スエ、ハテ、イゴ」に対して、「ウチ、モノ、アイダ、マエ、ジブン、トウジ、タビ、アト、マ、アゲク、クセ、イガイ、ツモリ、キリ、シュンカン、トタン、タビゴト、ヤサキ、オカゲ、ワリ、セツナ」には口語体で使用される傾向が見られ、「ユエ、ユエン、イライ、オリカラ、トジ」には文語体で使用される傾向が見られた。年次変化については、「アイダ、アゲク、イジョウ、イゼン、イッポウ、カギリ、カタワラ、ケッカ、ゴト、サイ、シュンカン、タビゴト、ノチ、ホカ、マエ」では口語体での使用の増加が著しく、「キリ、ジブン、スエ、トジ、トタン、ナカ、ユエ」では、口語体での使用が大幅に減少していることが分かった。一方、「アイダ、イガイ、イッポウ、クセ、ツイデ、ノチ」では文語体での使用の増加が著しく、「アマリ、イゼン、イライ、ウエ、オリ、オリカラ、ゴト、コロ、スエ、トウジ、ホカ、ユエ、ユエン」では文語体での使用が大幅に減少している。

格形式については、はだか格とに格をとるものが48語に及ぶ。全体的な傾向としては、文語体の方が口語体よりもはだか格をとりやすく、その傾向が顕著なのは、「トキ、ノチ、ホカ、ウチ、アイダ、マエ、ツイデ」であった。

本稿の調査は、『太陽』における従属接続詞の使用実態の概要を明らかにすることを目的とするものであり、今後、各語の意味や用法の詳細について個別的な記述が必要であることは言うまでもない。

参考文献

- 市村太郎 (2015) 「雑誌『太陽』『明六雑誌』における程度副詞類の使用状況と文体的傾向」『日本語の研究』11-2
- 奥津敬一郎ほか (1986) 『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 国立国語研究所編 (2005) 『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究—『太陽コーパス』研究論文集—』博文館新社
- 佐久間鼎 (1940) 『現代日本語法の研究』厚生閣
- 佐久間鼎 (1941) 『日本語の特質』育英書院
- 田中牧郎 (2005) 「言語資料としての雑誌『太陽』の考察と『太陽コーパス』の設計」『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究—『太陽コーパス』研究論文集—』博文館新社.
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高橋太郎ほか (2005) 『日本語の文法』ひつじ書房

- 馬場俊臣 (2005) 「逆接の接続詞・接続語句」 国立国語研究所編『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究
— 『太陽コーパス』研究論文集』博文館新社
- 松下大三郎 (1928) 『改撰標準日本文法』紀元社
- 村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房
- 劉小妹 (2018) 「文法論における従属接続詞」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第45号
- 劉小妹 (2016) 「「文法的な単語」の認定をめぐって」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第41号

